伊勢物語新釋

四

特別
イ4
3163
203(4)

貴
14
3163
203(4)

伊勢物語新釈四の巻

四十八段

むかし男いとおもふをなげきて琴ひきてなん我

えをうて

腹黒き男の妻をとらんとおもふ時に琴ひきてなん我

よをいひてさぶらふ

とも見侍るやあらんとやうにうらみてげうとは艶なる

ほうにたれ来たる

○むかし男琴ひきけるを　知新抄の古写本は一本な

かくうるはしきぞ　琴ひくるを女は本パ保氏物語の此事をいふる

またぐつ角絵巻より左立ゐ御神をうれていきうどふきんを
つくる所の人はむれいどんといひくるをえてをうりうの神絵かく人
の琴いれたる紙をうてをを〳〵なぐさするにちりをうかをうろ
えてををうよかをるかぐ〳〵きんを〳〵くるゑをといはやうをいへる
詞なり

うゝわみねをげよんゆるゑ草を人のむれいどんるををでゆふ
ちれいうゝ〳〵にちよりををげよんゆるわうどを人のをれと
なをんきをを試しく思ふをを考をうゝわみ祢むれいどなどれ
草の祢の詞をていへるゑんゆる草いうゝ〳〵をゝ〳〵うみ
ゆるをのをていゝ〳〵夫婦みをたをんいひくれをいをうどふ御

つゝけ〳〵きたゝ〳〵なるゝうへよ大和御神よりわづやどの一村すれ
うゝわみむすびはよいまぐ〳〵かをゝうとえんえゝるゑうをあ
ゝを考ふゝゝ草なれで彩系よ人のむすびんちをあも
つゝふてまぐきををいをうゆゝるぞけゝ者ん苦わ〳〵と
いつゝふを今をを彩〳〵をゝふゑふゝるけゝけて下の句を捨
穂彩よ人のあをゝ〳〵んうへの幸ふ幸を思へゝよりゆゝるふゝき
ひぐををゝう

うへ〳〵

初草れをなぐめづ〳〵れをのをををひをゝれ
初ををのいをへ草のゆゝうふをををををを御へうゝ

万葉集巻のよわう草のいやめづらしとつるふるさて注釈
古意とも上の句は説ハよろしたよりのるを臆断ハうるれくハ
ムなくよ同じとて接続あるべき事ともハをくるまてもな
く行ちろもをくもとものをおぼしくるれを見古をよかるる
あしぶよハ行るまじきるすべくんもおろびひらぐ考るほをの
思ひくとらふんとくるとふひぐちをうひくるれ
ハ山をよめるハもうとめとうをを昔より男ひとるは
しひてとうんとうたきもしかくるれえざうしくけう
の意をたづ云ていちづらあれバうくめづしたるをの
るまふぞうひて見ぬ事ゆえうれくづてなくかもん

まるうせくるれる所ある者とうひてもをなぞうれ
くハ思ひまるひまづたをのをさてしくやしくをそう
なハくやそて歎息したるくるれの例うまさやうみであ
るうかさて又徒角巻ようれくをのをとうひてる姫君も
されてあくばさるもいるハ心のようみうしなどきくるをされて
とそいくるるうもれハうるの高まづらるるるるるよ思ひえて
をのよかをうつけて呼よんせまるくせしるぞいるめづしる考
をうとわめいをそらられを
四十九段
むうし男ありけりとうむる人をうるみて
女のたづあるうとうしるをそこをそあづしをと男もまうう

みていひやうく
ゐけるを十つと銭をかさねともいづたのまん人のちろと
十つ十を百くあぶられる人のゐけくめこがぐれい雑るを百か
さうあげんゐともまさわうたくべ雑るハ百まてうさうあぶ
術あるともいづ人めんをゐみるすべきろぐるゐる人け
ゐをうるとゐんるゐハその術もちうもいるべきを
○いづたのまん人のちろを 塗本よりうく
といつうれで
朝ゐハきえけうてもうるぬべ〜たきる世よ銭のとはつぎ
意のゐる世とある八男女の中をとうるうて世をとゐ志の男

女の中をとゐゐ〜一そのを八胡ゐ八是ゆ銭よのうろ
びきゆるものゐんどうきハよるびのうちるひうハ消のうて
もううぬべ〜世るのあぶれる男めんそる方よひうもかうう
ぬるうゐて〜ゐも今そいづたのまんなぐ〜そうくのうまく
ほうれくかうぐれでたのみよきううもまうげぬるを寸ま
ぎれうるうたきうと八世るゆ女のるよいひな〜てまうて
わづ男のうくをうるうく脛断古意ともに世分のををゐえび
又男
○今のゐれ本塗本ゐかくあるでよれ志本ゐ又うく〜男とある
をまうろ〜

吟風よちぞよさとゝハちらぶるもあれたのゝぶゝと人のゝ心を
如の字よ翔雲ハおゝとゝとゝみておゝそゝれゝぶゝそれゝるもまゝゝ
てあゝゝぐれるゆをたゝくよいゝんゝてき年の桜はなの夢風
まちらぶるるゆハゝゝうてなれるゆゝぶゝそれハけゝるもあゝ
ゝのみぶゝゝ人のゝゝといゝてゝゝそれハ六帖よちらぶゝて
ちぞのちゝゝそあゝゝるもゝ人のゝゝゝをいゝぶゝたのゝんと
けるゝゝをゝしゝゝくてはれゝゝちらぶゝての字ハ又白氏
文集よ縦旧年花残梢待后春難頼是人心ゝあゝをゝう
ゝゝゝやゝみゝゝゝゝゝゝん
又世ゝゝゝ

ゆゝ水よ数ゝゝゝゝゝゝもゝれきハもゝゝぬゝをゆゝふゝゝゝ
万聚集の字よゆゝけゝゝよ数ゝゝぶれまいのち妹よあゝん
とゝけひゝるゝとゝとゝてゝをゝゝてよゆゝとゝれハゝゝどゆゝゝハ
数のゝゝぶゝかゝゝよいゝぶゝけゝゝあゝきゆゝゝをゝゝゝゝゝ数とハ一
二三の数をゝゝ世万ゝの字ハ涅槃経よ是身無常念々不
住猶雷光暴水幻炎亦如畫水隨畫隨合ゝゝる文ようゝ
てゝゝゝゝる字ゝゝゝゝてゝゝよ数ゝゝハあとハきゝえてゝゝゝ数ゝ
世ゝゝとハゝんゆゝをゝとゝゝぬゝをゝふゝすゝゝのゝゝゝもゝえゝ
ゝまゝゝゝてゝゝゝゝゝとゝゝるゝちゝよゝゝれきハ俗世よやゝゝた
ゝぬゝゝゝゝゝ

○又男　何事とゐるよりひとなどといづまかでゐるかそき
くらん　此又男とゐふより前ゐけて言ふにあれぞさてそれにさく
びてきづきつちぬおかうらく人の中にゐまてはさらにられたび
これは後の人ぬかくつにほのごとくかなきかきしかそとあやま
るて斯文にかきつづけたる亊を見て前のちぬ人の又男ぬく
みてかかれるなぞ和きちらかえて又男といふをしきをすしに加へ
しなるべし
あぶくべるみにしける男をんまぬしのびありれきか
ることわるべし
記者の詞くかくたがひにみゐみがられよしのかどもにみるは

男女のはづかしくべしてそのびねくさしけるかなるべしとなは
さくあぶくらくべいたがひにまけじとはぶれるふまひをならそ
さて志のびありたとふるかは女にはいてなるやうにさことゆきどこは
男ぬろよはきていふるく法ぶ物の物冊子にもちぶぬ発めのと
のたびあくさにかよふてゐるをそことひやうなくるにこく
ひはえまつる所にゐてみえしれこゐかはすさまじれのてなるび
ふるきわるなし女まどゆるつる男ましていふなるくんとはなるをとられぞ
女も男によもへらまて志のびありさするをもはるべし師は男女の
しのびありけしる詞は余によれはびいはされなまでそまやうにふそ
はらん

五十段

むかし男、人のぜんさつよ遣うゑゝてゝ

ぜんさつとい遣れまんなる庭よりあまてゝ草木をうゑてるぶさいつ
うゑゝしうゑだれなきをけやけ時やけてるぶらんもこそちゝめ根さんうれんや
一そのをとうく植ようゑゝバ秋なきはやさゝぶらん秋のなき時ていなけ
きバ草ゝゝみてるぶさくぶゝもこそちゝめ根ともよかきやや根ハう
れぶといつてるん根さんハ移ともふゝをきくさてばかりのわのあと
ゞ若ようとれえいふくなゝ拾植おようゑんとうゑんなゝぶど
ところハたぶいゝぶゝよめをゝていつゝ詞とんえゝるゝやあゝんたろ
そうん狂歌よハ植ゝるゝとをゝをよとれうゝれハ俗語のふう
なう古ゑよハうゝしうゑだけうれあやまるゝうんといさわゝを

どけなうゑゝしうゑだなゝぶいられいぶゝをみゝゝハかくるいぶゝ
古ゑ車又業平物語のあ集ようゝ植ぶゝるぶかれあやま
ゝふをあうける所ハなう集を続よかりして植てさんおいるなゝぶ
ゝをゝをふゝれるゝうけてハうゑゝをゝひとゝあうていぶゝ古ゑう
思ひえゝゝハ同じゝるゝをゝるゝてゝふゝをゝれるのをゝをゝるゝいを
んゝとてのゝわゝぶみて意ゝてゝれゝてゝゝ詞もゝるゝゝいて
くゝるゝをゝんは植ゝ植ぶもゝハやすゝ詞ゝうゑ植ぶゝいゝ
るゝなれゝぶゝくゝうゝ所をゝみゝぶけうゝやゝるゝく植ぶ根ハうれゝぶといゝる
なうゝかれゝバ此めゝゝハ絶のもゝとゝある所をゝるゝうゝしうゑゝぶ
をゝんてゝをゝかゝんやを

五十一段

むかし男ありけり名もとくのちかうなりぬべきものをとてかくなりけるとぞ

和名抄に風土記云糉作弄反字亦作粽和名知萬木以荒葉裹米以灰汁煮之

令嬾熟也五月五日菖蒲を引遺集にも五月五日ちまきを拾遺集にも

かざりちまきを山すげのこふいをてるぬまさの船はせしころ

ざりて哀なる事道信母ちまきのいとしたみぎはよりかるこもを

ちまきにさつさいつるとすれんとえくるをとりてはきよう

こもをもてつむるなれど世間はやはやとてつみてとりとんゆ

をとりてえてはあしのをとりをもつみてこれも今はかの梁

みてもつむをもとばゆ むかしのをとこあやめをつむるなりけり

をとりてしばしば世間を捨てんとおもひてくだりけるとぞうあやめをとり

分るよりもむべき拾遺集のころざしにしたがひてみぎりよりかるこもをとりを

思ひてくだりてちまきをつくりて脚ゆあやめをとりて粽をするとはなしとこそいへ

ちまきは後あり今なりとてむかしもなりとそいふぞうちまきを

かざりちまきとは五色の糸にて五色の糸にて縛したる泪羅之遺風をつ

へてこふもいろいろの糸にてまきてそかざりをいふ

○ちまきをとりてをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとり

ちやをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとり

粽をとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとり

をとりてをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとりをとり

ものをとりあつうき物をしがわびしきとて雑をおくるとき
そもそも人よりおくるほうもくをとゝのゝをとゝのゝ
祝詞などふ神よむうしろひて来るものゝすぐれてよるとゝをやと
あれどんぞくて神をとゝのゝ人よりのもるもえぐつきものゝ
きものをちゝをはらくてをめいづるうちろぐのつゝを
なれどそれよりをゝつるぞなるけ
とてきゝをなんやうゝ
五十二段
むゝ男あしぐれよりけりてものゝうするわどをとせる
ものを
けしぐれよりゝ

そしてゝつぐわのゝもきゝどゝんゝ
いつでかくものゝ人ゝわを思ふゝろハまゝ
うくうちゝふまのゝもろゝわるゝいつぐをちなるゝ
けをれゝふゝるゝ人ゝまゝハ人よきゝれゝをつゝめていつる
何ゝゝんのうちゝをゝろゝんゝそのゝをハけゝてかくをハ
ゝることなゝんまゝ後ゝんせうちゝをゝゝ
ゝゝふゝといつゝ
○いつでかく 塗本ゝまゝ
五十三段
むゝ男つゝまゝうゝるゝよいひやゝゝ
彩やゝゝ見侍をたどゝゝふゝてつゝなるゝやおくゝ

つれなき女なれバうつゝにはあふべきやうもなし　せめて
夢になりともあはんとおもひてぬる夜の夢にもあはねば其心はゆか
んとすれども得あはぬとみえたり　ひるのみならバ女のもとにもえゆ
きやらバしてよもすがら夢ぢをたどりてめぐらへてられバ後と
もおぼえぬばかり夜の夢にまどふさまなれば、さて夢路にハ実に
露やおくらんかつきく拾断　天つ空の従ろし古意に
そてはひぢもしらぬ袖のかれおくらんといふ心にもあらざれバ
○拾穂本　夢ぢをたのむとあるはいかがわろし

五十四段

むかし男思ひかけたる女のえうまじかりての世に
女をわがものとせんと男はおもくしるれども得ぬやうにな

つらく成時によめるなり
たまたまハかりもすゞめなきのそぬきうらじといたのむまでうれ
拾穂臆断などに古今集まるらしの川よしやくるそつらつら
めるやくらひてしをとハいふすれどとえおしおもへどもくもとえぬ
もとハをやくたのみおかるゝ心のそかやうなつひ古意にもその
ことをとうわするゝそれハ行やまうくさやうかそふてあらば一ろぬ
意まゝて女の心をおもひあゝめどたまうかに女のもとハ
よなかなかは行ひえる時の心ぬをなどの心わすを思ふやうにさこゆれバ
そのまう　かしづるたのみにするゝにきまのくてもかひなし　え　う
るゝ女にハあゝぬとのもとうちなげゝるゝ心をうれのてもよう

とうかくとうぶれどはつみ月のもちづきをみるとてよ
づくるる月のをみもさまにうれいざほかう

五十五段

むかし男ありて思ひおこせたりける人のいとあはれ
なる神無月のつごもりなどいとさむくしぐるるに
ちかうなりてくらもなるよりはつの月のうさはらいてふれ
ねんをうめくうめく

歌 神無月草かれはてぬるよりはいかでかやどりなるとうら
いふをまさごしけるなどかきをれさがくく草のつほりは
まことに雪はやどりなるづわび神そその草はいかりよりはるはど
をくれば恋の思ひまさりて後の雪はやどりなるとうらをさく

五十六段

むかし人ありけるをとこのみやすんどころにて
人をあるぬえをもれはかるる歌うらをもるぐさつるるをといふはなるき
くよりもいをうけてもよるぐぬ恋よ身をくるぐくよりなるをまくせうく
かるる文くそのゆをはたうたさくるをいをうくるさはづうるぐたるなれ
ぢうちまてくよはくるよりぐくくなることりてもいまくくなれぢくく
まぬをのもいする男をはつるぞうつまる呼のはちをぞうぐくく
いをくくくくはたぐつ
こひるぐぬあるのかるをふやどるてつわをうくる身をもるぐたつるの
恋をぐぬとはいをくくぐるくくをなるはやんくつをくるをくく
をてせんくくつたてをつるはよぐぬるるをくくはをいをうけてわぐるる

仏をもとより身をもぶてつてくらしなたるゆゑ
見えつるゆゑ歎息してうれたつるかくしいかくらゆゑを
わとぶぬたさを人なれバつをまさうつみをいべきあゝ身をうつ
みてなげくよりをらひやうでたをとけやんとらしてあゝ
永くらくらく世ハ愛の苛責よやどるものなれで二三の白ハ家く
をいたんかれ存よいつくはずのをおよぶぬまるたくをこひてと
めるよりを苦よう考ふるくなさるようて徒ほうれとさえ
○その外ひする男　まかるちゝ　その子ひうハ上のくし

五十七段
まつ　とえ祖よりわ
むしんつさなたむこのくなる男長屋とくほるをつくうて

をうつそて
仏よくたをぬらんとうてもれいをおくあゝくくうろに
さおさをぬみくしたるきとそくのちろよつぶよるぬる
まひすてんゆるをいつろちる男なるゆゑる隣のやどりくたるづ
ずてちつろ来ていうこのすたるくちるやと戯をいひなどもす
るをうしなくたる男なるばさええせゞ長岡ハ桓武天皇の延暦
三年より十三年ゆで都なるゝ不ゆて今ハ京となりてもまた
さびくくあらちなどもきれうをおハきゝく
○心つきうた塗本ゝたゞ今のうれなはしたうたてもち意の本
のようつたてもうれまろゝ

そこの隣りなる家に女どもなどいろ〳〵
あつまりとゐやらちはてまこをひとつよいつる
なり保氏の物語りは昨ごろ女どもとつよいつる
ひとつよいつるとて同じことばへく茶花抽何もあるべき家といい
ふるひ又えらう俗よあるべきるなれば古意さい家賊とんて后
又皇女の賊よりまれなつる侍子をつとりとられるハつもわるし高賊
ま女のいらくとくべきるうそちもあるハ吳なる新ともなしとそこを
みて大てんようしおをこを何くすれくるをこみあるべすぐまてと
れ女うほたうをるすべしやこ女どもたうう〳〵ハ家づくしてあ
うく女どもとくこをひとうあるべあくるまようべ何く

○女どもたうう〳〵 塗本よりまるべあうう〳〵とこを何なくてこ
家づくみとあるゆのてまをハけうあ西なし
みれうなうう〳〵れで田うう〳〵とて此男えをうう〳〵ふ
るまうおるなれば〳〵つくるよ田をうう〳〵とて此男門よ出く
えてとうくれうなんをきるく
○田ううすべて 此男えをうう〳〵 それ塗本よりまるべく
いうしのすれをのくしわべやてうつういるを茶れで
すべまてるゆもれくのしまべよたうをいれてあるうつうく
なういうしとハものくすべうくうをこ何くすべさとものハゆもれくをこ
○やハようこよ何じこて此男ハもゆもくくをえあるふ田うう〳〵とて

おてとうくおてな人ハ弱ごろを始むくのすぐさわぐかくもぐなど
そのまぐとたつをとていみくのすれをのくきわぐとハつるんさること
拾穂臆断古意ぞどよられいらくのそをとを詞と男の家居社
むをしろををほう奥することをとうまるいくたぐう家所の
るやからぐすさをのくするしやをそいそろくわぐやといしてなを
いぐ又家石をほうくきるんを男社あげてれくるかるくゆを
ともなし
侍男あげておくをかられよられぐや女
しもくを田くをたそ門を出てとうくくしけるをいうくのすれ
をのくしわぐやをあをいををれぐいくをぐてあげてれくをいう

かくまるくん
あまをよくうけられいくせのをどかられやすくん人のれをぐきをぬ
けわをうあいくを終をどかられぐうやひくすくん人ををえて
をしやをぐきもをあるんそれゆををかくハあわくうをめくをを
をうん人のすくすてくしやぐもくくく年程ざくそのくりをしれを
ぐけくてけぐうをものををなぐもくいくくハあくさぬをしを
きぐんさてをくを男社をられて人えるをでくすあでを終くやぐを
あをくくををくみくををていくるんはあぐぐもをぬくを河狂断
ををやををぬくををををを師をを今集壱続をさぐあて住くくあ
をくをん今ハ一向をを人はをもをぬくををををををくまぐをていくを世

のあどなれやとうあるみもうけるとあるみもうれいば又ちる本こう
屋門朱哉とうけるを呂神の歌ぞなるやとうあるくこいはぐと
とて歌どなわやくくるこいはどまれいばやとこのてあそにてさ
てのうよかくとておらどもとめぐくんとうつとなわう
ういいてうちうう来ぬてあるとうれどひ男
男さらぐていくわるるのまれが女どものそやくは象をいでるく
らぐ分るみくまれいばさるうるうたいるくるかるけて
そうてきとで男をまけじくいでさてたるふるくしたるかるく
てむきるくまぬてうるれどといつるるをつぐ〜
○いいてのトよ　は変ることは　ある本ハまるつ〜塗本よりあるよ

ちくぐちぐちるる象つくるてをうくるいいてそのあをけるるい
ふぐ〜やさ
むぐくまてあるくるるどのうるれいるるみもれよすくくんう
あれよりくく女のるるをうけて侍分のうほうよむぐくまちげて
さあまくるるるどのうれりさいるるるみもれそろ〜れ鬼は多集
かるくまいくるくうるれ八古事記の上巻八千矛神の侍分くり爾
波都登理迦祁波那久宇禮多久母那久那留登理加ニ又
日本書紀神武天皇巻ヨ慨哉大丈夫慨哉此ニ于黎多かのぐく
ムえくく八千矛神の侍分て沼河比賣の家まて夜のいくくを情
みくふいてうけのをくをうるくくとのくくい神武天皇は巻なる

又五瀬命は矢瘡いたみ給ひてをたけびしてうせ給ふ紀の国やとの
たまへるよしもしるされたり又万葉集に多集の字
をしこなどよめりしかのみならず中昔の比までハあまたある事に
鬼の字をよみあやしく今昔物語宇治拾遺などにもみえたるを
みえたりその鬼といふものゝさまし或ハ男になり又なまめきたる女に
もなりなどいふくゝに変化するものなれバ是をもおもひおもひに
女となれることハまことにはくにハあらじあまたある類どもあれ
どもその女に変化して多集人といふにたゞりをなせる 三代実録にみえたる武徳
殿の東乃松原は鬼ハ男のかたちにみえ今昔物語なる近江の
安義の橋にあるにすめる鬼ハ女のかたちにみえたるなど是也べし 此る事を契沖法
師なども中むかしの書にみえたる鬼のさまをくはしく考へられけ

ん脳断に鬼ハ陰氣の精なれバ女も又陰氣をうけておほくあるより
きたり性をするどおなじことばにたとへていへるにやとまであれこれくさの
此理をいふ事もなほこそ鬼ハ陰氣の精なるしいまは女なるのえき
あらまじおもひつくりたることを女にあてたるのうちにいふ
べしと八さらにおぼえぬなり又玄旨法印は女人ハ外面似菩薩内
心ハ如羅刹とよみしもちろんまことにあるなりことをかくるも同じくいはれたる
ものなりしかしたかくなる女ともかいろんとかいわれて
ほいろいろのさまに世にひろまりて門の戸によ男ともまてとくとしもい
なるかなれどおのもとを離れていろいろのさまにたちまちに頭へ
とたいふれてありたるへのもすれどのうしわざやといへる其外じく

男をつくりたそらふをこん世間ようちわびての云けて諸国られと
たとえば
うちわびてわらぼいろをきるこせで家を出づるゆうまーものを
はうのこと八穂いろいんらいていざないたこどもこころふれのいろそび
ぐさふーしまふるすなれでこるもいえおびをーせよわびて為穂ひ
ろいまふをさくなるーば家も出づるゆいてむろいてまるーせうん
ものをてたいふをているくうちるびておちぐいろふとハせよるびく人
のみち穂をむろいて命をはぐちものあれづくも詩よ彼有遺秉
此有滞穂伊寡婦之利とあるられく又延喜式の雑式よ凡百
姓被雇刈稲之日不得率人拾穂とはるをはぐよいろせられで

られいるーーふも世よわびくの むろいんたるるて出よ為穂をれ
たーなくなるーーのいるーーんいる
五十八段
むーー男京をいるーといいんいんーーーよすまんとおいいて
すーわびぬるハいだいうの山里よ月をいうんべき花どとえんてん
一そのをうたるすあるて為よすーわびぬ月のをいうをび山里みを
るるていをれで今ハそのるーるとおるの山里よ月をかーてくよ
きーきぬ花どををいるてんくよまーーきぬやーあーばかーやうに世
のうをハあーじいるーーん
○今ハうだうの 塗を二本よまーーー
かーてものーくくやーーてまるよいうたるれバたりてよあるをたなど

していさいで

ものくるしくやむといひ疫ものくなりわづらふ空のさ
まん多の病となれるまゝにまるいとをいひひさし
こむものあどけうてふとまるかるさまんいとをたよく云詞
あうけるとうよいもどろうていさうこせんとそれりそふあるそれ
又いはまそれいまなどゝ今をすまるまん法華經を以冷水灑面
令得醒悟とあるもかくるはのるゝ
まるうふ雲でおくなるけりのけるかるれのおいはしづくう
はかりのこいはるれ乳のうくよ雲でれくなる世をてよくがうけき
でもの世は露よいあど天のけるをわるかるれのういはしづくみや

けるうんとものるまをいはいもうんういて雲集のせうる沖つう
いるくまるそへけるいるくまるそといるどくあるそ
て和をやるもの
ものいてでいさいでけるうる
さるるいさせてといいて又いさまるうるといるそ八十一段の文ま
みこのおるそいるるかるのをうてえのるまいれどあると同
じるみくれいれいじるをこそにるこびるるいて詞
をばるもるそるつの文はく古意の伝はれどう
○といいてで 塗本はまるど とんいてるる本はまるう
五十九段
むくに男けるうるえづるへいそうくんをまあるくざるれで

いへとうじまめよ思ひんとうへ人のつきてひとの玉へいるけ
うれハ女をもろそうにそうるハ行ゝねどえばゝへいそうしくれめ
ゞふよめとあひともにあてゝ行んゞろはいなどすゝやうけるすスセ
ぬさをとうろそんめいうとまくまやうよんつるやうのさとゝも
なさをいつゝもけてふをとばんゞゞうてゝゝゞゞ暦断石えん
ともにんゝといつゝさをとれめゝやうさていへとうゞええい夫ハ
みやづくるおてつるよあをきねゞをめひうてものれいうやう
よわろそうにさをゞまやうふちんうゝ人のあうてそわゞゞれ
うへゆゝるつれていさゝゝゝ人
○まゝなゝゞうゝとゞ　塗本ゝたゞゝ

世男うさの使ゝているれゝゝふ
豊前国宇佐八幡の宮へ勅使つゝるるハ佛代のはゝえう
佛即位のさとつげゝゝ常例さゝでもゝゝるゝうゝゝ
ずゝうゝゝ
あるふのさそうれ宮人の名ゝてなんあゝとさゝて
さそうハ祇義ゝ佛使を祇義する宮人ゝて今の世ゝ聖さ
段人ゝゝふ内ゞ男のゝゝれゝ今ハけ祇義の皮人はゝるゝく
けうゝ男のさゝつゝへゝるゝ江家次第十二の巻公卿勅使進
發并路次儀の条ゝ出會坂関ゝ近江国祇義到勢多驛ゝゝ
伊勢祇義奉迎近江祇義到鈴鹿驛宿ゝゝ伊勢祇義於下見退

橘退去渡樹田門大神宮檢非違使可祇兼

とんえうきふて去ぬる勅使のよさ
ものたまはすおくいかるにその國は祇兼の宮人いづるすくうう檢
非違使可祇兼あるふて祇兼は今の世は祇兼とそは似て侍
ふる宮は名をハいうぎうもうぎうもう
女あるじにかけとせよさんぐいのまぐらいれでかいうけ
うて出しうるうるまなりけるたちぐれをとうて
さうせようそまにうてのうてさくせよというさくされのたう
いはくまい菜魚うもいなをいつぐ酒のあつせよ魚菜なぐた
るをたうれうつぐをふて菜をもうるうへたちぐれを續日本
紀は橘者菓子之長上人所好又西宮記十六の巻内教坊舞

社条は天徳五年五月右此事以橘為菓物冠酒えうとうえうさ
きだよれさうれとすうるうまて侍使の和るもの手たうるう延喜式一の巻ま
酒一斗二升橘子一百八十顆なぐ
うて榜るをひとさうれるさーん菓子は今の世ふを酒まれうふをいを
行うも職員令の大膳職のふは者菓子らし北山抄は八一の巻は
供御酒次酒番侍従唱平勧盃一獻後次供御菓子干物
等同巻は造酒正勧盃称平御厨子所供菓子干物御酒又
四の巻は於蔵人所令給酒菓子なぐうえ江家次第十七の巻
御元服の条ふて此同供御酒希御臺三本菓子干物各四坏なぐもんえうれで
菓子いたうれまううるうてとはうて女はうるうてたれまうせ
たううをうみていたいうけうる

さつきまちて橘の香ばなつかしむ人の袖乃かをすれ
ばなつかしきまつ橘をみ月をまちてむさくるしきの名れどいつ橘の花
の香をうしげば昔あひそめし人の袖の香にかくれどそれはつれ
なし人を恋しくとおもふこのうち昔の人とそむしかぐ
はしい人をいつさてもうてけるふるさとなれども橘ちるべきの木
はもの思ふよせてむしの人をまつまぬ人をいつるよしく
女いらろらうぐかくまて丈はまてさく人の名となりぬるふ丈を
ちる不昔わすれぬんづへをいつるかるは女のいろくさぢて尼はいな
ばくまく世ろうう徒注れたえぐとて又古えは此分のそ
なろちけるの香ハ子の香くとおもはるくそいうたひぐこれ

なろうるはけるを分ふよむべしやを
とおひくるふで思ひおて尼はなうて山はいろにくる
とおひくるうぞ世ひ出てとて昔まするぬを名る丈の分をとく
て世のわぐんぐわくておまてちをくやうもそづうも
ちひ生るくうえざれで尼はなうてとを初はでうた古えは
世使もの丈なうんとおひもはうざりけるかくふみくるをき
ちてふるわぐろ紀ちぐて尼はなるくとるまてるいうぐたと
へ分るむをさうぐもも丈とせしく人をえまぐべきやうなくふを
きくちうていぐでろうをわぐろくくるれあうん
○山は入てくる　塗本はちぐ

六十段

むかし男つくしまでいきたりけるにこれはいろこのむなるすき
ものぞとすだれのうちなる人のいひけるをききて
このいふことを此人は色好むなりといひて又これがかへしして好色
者ぞといひつるくすだれのうちを男はおもふならちある女どもありて
その中に此男をえしらざる女のつゝしまぬ女にかたりきかせる
詞ときゝて男の心にそしりたるとおもひてなみかくる人も好むと
すくなきおもひやりおもふなれど人のもとおもふにはかく同じやう
なるところをかきつけたるなりそのもとおもひしかりのまへにらける文と
○いろこのむなりすれをのぞみ　塗本うしなはず
そめ河をわたらん人のいかでかはいろになるてふことのなかるべき

此歌の意は色好むといひつるにこたへてそれがしは色をこそ好まね
ども染河をわたりて来つるゆゑに色になりたるといひつるや
はるはそめ河といふ川のつくしにはありしなりけり　後撰集に
わたりてはあだになるてふ染川の心つくしになりもこそすれ　さて
いかでといふはいかにといへる心にていかでいかでといふことを
をつゞめたる詞なり
○ちよわかふべき　塗本うしなはず
女かへし
名にしおはゞあだにぞあるべきたはれ島浪のぬれぎぬきるといふなり
此歌の意は染河をわたりたるゆゑに色になりたりとおもふらめどた

とくべきたいを略もたいとふ名をおいてけうをあべきを語なれども
ちらふあぶれるすなはちされば人をといふてなを名くと人も
いふるをもくに深川もそのを理をそをもをそなたるをいな
し深らくいなれえをまを世川をわるうたるゆえをよをみなうた
アとのくもくふいたぐろをやようをなるまくんをあ人ているく
腔断を世をかをを男のををを名をを人はあぐを名をくくををるを
好みをいけるざるべしたを略をいふ名を信のあれざぬををたぐ
人のおをををうとをふをなぐくてもうぬをいふをくんとをけるいう
たびぐるをくはぐをる女のをうををぬひをうをいて又をやうに
をけるじをうをべきをわうもをくしうをれていはいのをれをくし

つををけるふをなるざるをやすべてをくしをいはうけをうむをうをくまれば
あをを考てをくべきをををぐをうるけてめをざぬをををを
なれを名をおいるををいるををいるををいはをいを俗人の故事をを
るをのいれどをとををりれどをいはりををいを又信のめをををぬを。
づけをる八信八をのををめをいりをなをば略の源語をいるのをを也
古来を浪を白縮ををゆるをのゆををいをとをれをる八をををし
ををてををれいを略といをを陸奥を万葉を風流士ををたれ
をををををたいを略をを明ををををを明をををををををををををををを
いをををとを八をぐをるををいを風流のをををを八ををを万葉をを風
流士八みやびをををををををををををををををををををををををををを

嶋をはしりのろ西へ

六十一段

むかし男ありけり 男ありけりとなん

くんぜうの家なりける女にかよひけるを

くんぜうの家なりける人のこゝふつかばかりこもりゐて

ものいとなみしける人ありけるを

男ありけりとなん

男ありけり 白いはづくりとをうよみ女いくもやでからくさを

をうなよ年はいかゞとぞわかくもんのうれるふをうたがひなづくいそ

うしきやうをゆるすからうんをうれきくのをよつくと

かくてはなんようはみれうにゆきをぶべきやうに

いひてくのさそひたるくるまそいたりうをうぶうさうるのかをまで

をうれきとはいつるくんくのふをとおようくゆうておをうおるすく

をとをんしくんとはうをいをまはいかゞなれざりし男くおくゆをなどいをを

世女くのをよつくうをを婢をひをるまらうをのまくを生て給仕

すをうを

○むかしの下より 男はらくすをくをるはは況みうをうを

いづくの本をもをれはおうをくん

なをぐをく袋をををの袋ををられて生を心ずりけをれあをくをできを

ををひる

背をおれをる袋を袋ふいをを衣をををうをだをををるをやれ

をををくあをくををるもいやれを女のうちをけをを猫をくをくく

あををはををじにはを襖ををれてあをの云ををわをらををなをもをるを

とはうくるまとうくさるそのまゝて今の世乃羽織よりハそのくおさく
羽織ハ昔の織襖よりおこる名にやあらん此織襖のうすハおもふべしいやしきもののきるものなれどもよ
てよきもれどうちしふそよき人もきるやうになりはお嵯
峨院きてよ山ぶきりの袴きられしに云云ぬのくあをわくあつくらまて
いとおほうかるそ云云山ぶきどもあしあつかひさけくぞ有し小
あをおとつぼくうらんに云云かやのさしぬきよ袴をのくあをき云云
侍きうぞくども八白きあをわくらきてしろうのものでいして袴
かうくり云云侍もあし人をうらいろいろあをつゆくさしてき山よ
すりわくられいまうつぬも人をくらバものあをなどくよ後
うせてきうらしゆるをえてきるべし山でめうなずやうのうちく

の事ふそかくなりしきの人ゝきさ後こそ行ろかうへわさつまてくるこそ
ゆるをとみまさバさむき風をふせぐためにきぬよしえ續日本後紀
よ天長十年五月の条よ天寒ノ衆人多著ニ襖子一とみえてえ
さうきれハ夜の衣はうるよ襖をきうきてちさるべしうるく八日本書
紀の允恭天皇紀巻よ甲ヲ服ニ襖中一とあり三代実録三十之詩
巻にも送ニ綿一千屯於出羽国一為充ニ造襖料一とあり元慶の比
出羽国まてゆるひありかゆよ軍人どもにきるべき襖をはくらうて
なりされも出羽ハ寒き国なれバいくさ人ともあつくはきるさ
よせなそくらるてなるべし續日本紀三十六の巻よ征東使請ニ襖
四千領一又同巻よ勅ニ征東使一云云夏稱ニ草茂一冬言ニ襖乏一とある

さもいろ〳〵考へべし　江家次第五の巻春日祭使途中次第の条に水干に特襖などをものを随身のきるなりとあれば水干
けんぞくの　羽織は袖てをのりはさるものなれどくつはつくり物
きぬなれば袖なしなるべくつはさるく　今昔物語に白布のあ
わせなるこそけるなれば下衣なるべしとあれば袖なしなるべし
しかれども西宮記一の巻童親王拝覲の条に又令給親王
乳母三人襖子各一領とあるが対女のさまなり　考へきるは女な
きもの　襖子は袖なしなるべし　遠山ずりとは草はしかなどをもて色のうせぬ
すりかたなりつかはもつゆくさをもて遠山ずりとつゞ
くめるなるべし　すりかたの　すりかたは又古今著聞集に和泉
武部まのいて編笠まつりの田中明神のほとりにて時雨の
しけるにいですべきとにはかにふる童の襖とりてかぶ

りてきて雨のふるに笠の下白のかぶりものなれば此あるべきなり
しかるせてかぶりをとれでもかぶるは然したるものなるべ
きなりけるものを女のさて出るは仕しけるけるなりやうあり
さてついでにいそんむし　特襖とは襖のは随身舎人牛飼
等の著きしものなり　また袍袴の事なれば袍花薬
葉は特襖事なりあるとともなり　縫物をもしくるとそのもの
する彩り又織物をもまた織襖とくるの山をみや或説織襖
とそする　特衣二重綾也　江家次第五の巻春日祭使途中次第の条に共諸大
夫皆著織襖とあり又前日於里第有主上儀とて見
諸大夫各著色〻特襖とあるて同じ諸大夫の織襖をも特襖をも
きるなり織襖を特襖とも特襖をもいとて此於後もあきらめ並べ
きバあるとよハとれあ〻きるなるべしけるてすこしとしたくのさるハ

識褸なるべくきこゆ女かきくらしけるハめのくあそきなるべしまろく六
人につかへ女なれバなり雑令ニ凡官戸奴婢三歳以上毎年
給衣服春ハ布衫袴ニ云冬ハ布襖袴ニ云々とえらかまる
げる女の布衫襖きくるる今昔物語にええて上にまろせり
○髪をゝ　これ文塗本によりてくハへつ他の本になし
もちろう
くさらなのはらつゝ人れふるとあるじふもひられぞれたらせりけ
ア男わきをバまろびやとて
はらつゝ人まへハおとらせたまへといひつれあるを次にかさせり
とある詞をもへもひびらせてなかれたる文のれくみなりけた

つくべしわきをバえぞととえたまわしやはじくさえさくく
いみしつのみはひそいづかくはらちまるがちもなかりけれ
此おほきハむうしのまほひやあらし哉をそいづくへゆおてなく
なかしぞちわきはらくるれのあかひなきがこくあらにかきて
さてそしれ女とおさろへさせるをのかれとそしみやまかるく
くやむハわがまれわとづまびむるそるにせしゆゑはかく人につる
さあくやうふもなわかとえくるまてくかくさうがれでかくかれとそ
てみその倒まられいびおれあかきをかふかへさるく
○ちわきがきも　塗本よしれず
とらつそつゑはつハしと思ひてつくへもせでねるくをなざいくへもせ

ぬるいつぐなをみぐれちばるいえもええびをのもいえれずあつて又男
いつへきぬいまづーとえひてなれどあぐーとえんていまづーるゆ
えんといつもはぐーたるあれど後のあるみあるええびをの
もふまるまびとらひまづーとうしたるいえう
○又男　ちをようてええり
きまるや世るれるあつてをめづれてまあみまぐまるえかなる
一そのまきまづめのちをいて逢分をのづれて年月れ
ぐえひをほらびつまをまるのまるうぐえあるいふいんいんまね
をつまをるのまをあがかをまをいをーたるえんうまやひるん
ふをはてれ白ようひめらーたるいえをねへうれうかくいひの

きーたるる何へうけんをてなるえをるるるるるん師をけうれたの
白られやけんてるられるれびんをめまでけるうんびーうれも
つまーをるひめーたるる初人めるるるを老人をるるめるゆ
をるん又古をるよあつてハ近にをひるう世丈近にるあるをを
女を俺ふへのめるるんをめるるハ歩人今集るるるんめるをあるハ
いうつふをいてるれ例うををーぎるハきるゆをと師のいをれ
たるぎるくをーをるバ上こ近にのるのたるてハをのびび
○まるるうぐれたる　塗本ようたぐ
ぐいてるるぬめぐてるるせられどすをーみげるるいづちるね
らんるもをんび

六十二段

世のうくさをてゝ身げきてゆくさきをしらぬ人くの
むすこ世ちうあるわらはをいでちよなきけうん男よあひえて
しぶれもくどいおんまもおとうなれでまちぬてなるゆゑん
がうちをむすこを人をよびけつてうちうを
そうぐうはぬきをれんをつくちをて老女うてなほさるんあるをい
つうがうまハ老女をいでられををを五中おハなきけあふ
男をんとをうれのをくもおびてんのうちをなをでくておのを
さけあるん男よりひをんてしぶれをもつん此ををあゆおをち
しぶををてうをををこをん今の世をうをとをべれをを昔ハを
おをんつるの夏くあ世ふまををふをの京れ殿をうつ住をを

多ノ世かのトウフヘヤヲナにハこのトイヒしコト

ひてのちを此寺をうつ伝氏君ををとをうをまをるをなりうを
きもかの寺をれんをうちをやけをいを祖もをれがかのをを人ををう
ぎをくいをいをんをもををわうをのをきををるをなれバうをいをんう
げをたをうををふべくまをうををぬ男ぐうををを男ばをく城
つをう出てををををよくんををををををでをいをを
○世をうをうる　塗本よををを　わうれ　ををれををふ　いをでをの
塗本ををたをををををををある本ハあやまをを　あひえて　塗を二本う
をををを　いをいをんをもをたをうををれで　塗本をををを　むすを三人をを
びをうをつて塗本をををを　今のれ本を男ぐうををを三人ををある
をむのをををををををををを

ふるうしまのみこけあくいてゝやるぬ之命なりくるなん
よれたる男でいでゝんとはくるよ世れうるくれとゝ
三郎い弟三のるくむゝ人のるを吉郎二命之命とた
いでゝくいつよれは男ぞいでちんとはせゝるい母のはやう
にあんべきはなる夢をつくりてゝくうれるをようくちゝえ
てゝれあせてるくゝ夢をはくれゝとそゆめけやうを考へ
てゝまるゝの夢ハかうゝの夢なんとゝとれあくれるゝくされば
此夢あくれるものをゆゝとれとゝいあゝ一の夢あゝせけう

日本書紀崇神天皇巻ヨ兄豊城命以夢辞奏于天皇曰
自登御諸山向東而八廻弄槍八廻擊刀弟活目尊以夢辞

奏言自登御諸山之嶺縄組四方逐食栗雀則天皇相夢謂
二子曰兄則一片向東當治東國弟是悉臨四方宜継朕位
とゝるをはゝ兄ちをのよゝえゝるゝれ物ゝ人なり
又今昔物語ヨ今ハむゝ之治殿の伴夢ヨ大ようゝを
作らんゝたゝるゝを夢ヨとゝるよとゝをゝれゝあゝ牛み
つゝでたゝんゝ中たゝるゝふまゝるゝ人日あゝせゝるゝれば物あ
ヨつれゝて奥ゝ作らんゝゝるゝ其作つゝゝのゝ位ゝてゝ
れ人あゝるゝまゝて世年ゝをゝてゝて牛ゝるゝむゝゝ
中かゝゝ夢ヨよゝえてゝるゝと作ゝとれゝめゝゝれ作夢を
まゝくゝるゝゝゝ此作夢あゝゝんゝてよれ日をとゝて日かゝの

[illegible]にうゑつけうの製作して世俗愛をかくしてせばしてあれど三代の
清門の冥加をせきやうばかりんとゐはいせ中ばかりなる実は三代のほう
しろうきさせばしてはは代ちかく後三条院の序時宇治よりう
せばしよりう愛はあいせうえうをみきばはさしるくのちろく
みうてともかくもいひをくものれきバ世ばうれの愛ろうをあ
いるもこれぞあるてよれやうよいつるあそばうん
ちとくさいとちのさけまいてこのをあ申ねるはいせてこれ
とおくろうはう
ことくくをを五申ねなくねをくくをくさんばいををさけま
しかも甚しくつをを申ねのなるけうたはよくべていつるゆをや

いつでこのをえこれいかのとをなるるすさねよいつるうぎをしき、
こハられこれ命が思ふんをいつる初くはてたをはをををなくでもあ
てよろしく記男をぞをあ申ねよるどたいられてはつるれあ紙
をてかきしなくんといをもるいうけるくしやうをうてハ物しあ
つ記ろをとハれををしていつるみるあんばくくを世くくをおい
もいぬをちあらでぬうしみいつるもうれ申ねををていつる初な
るをや
物しあうれる道はいをきはうしいよう
ろうしはくくハ申ねのねをしあうくん
馬のはをうてかうしくなんぞをといはれではうれだわていれ

て行よけて

中ねのけ〳〵きてるるとどめてきめてせんとて〳〵とく

のやうよるのロをこん命ぞるん〻髪をとりていつさりふりける

文こうう〳〵ちんゆ号ちとかやう〳〵よりぶゆとりてきてすれを

ちちと人をいるをそけなーええの泊をく拾穂抄よハ永母の号ふ

ちをよと知られど母ハ号ぐちをこて〳〵ちまゆをとりて

みをいてるなーあこれがりてえをいのちをけられ〳〵ちざく

けてけち男ええざうけをばうま男れ泉よいれてらいまみ〻

るを男ほのんえて

そのち男れちざれでまるよりこれのれいんて男れよ

いきてやうにをうめぐひえ多式男れけのふんつけこん

ちくとせよ一とゆ行ちぬつくも髪永をちふしおりげえんゆ

行られの第うを式しうてきめをれ分ちめるん一そのことハ

ゆうをれいこく手老てらぐうし髪のそ乃侍のえゆうを

永をちひきこけうまけうをちうこんにみの白をれたく

てるべーけをれよいれてられきべをくめへるゆくん仏

れうひられが夏よそれ人のえゆうぎく悪しけんめかよい来

て侍をいえゆちんとをこ百とせよ一とをてぬとハ年老を

うよーを恭しくえをんさるいこく手おいるをけれとちん

よーく詞のれすてよちづちべをちつべーつくも髪とハ老女の

髪のつくもはもよ伊てらづされをくたづ〻山ゐるはづめてれくい
へるゑさあらじをれるみらづおき髪をつくも髪とらひなるひるま〻
にゆめるなるべ〻これもひ〻ゆるろくをあるまむるくをろくいつるみハ
あらべさてつくめやいくをの和名抄水菜部云辨色立成云江浦
草豆久毛一云太久萬毛とうるる名同じ〻れバちまなるべ〻古意よハ此江浦草
を今もづくををのとゑゆぎよはとわるる髪めぎれのおくと
いをれるるつくもをづくるハするるかをゆるるれどもづくハ海の
藻のれなれべ江浦草をしそれをるバ和名抄海菜部藻を女
らべて出〻あるべをを水菜部よつるれバれどるるに海草ハふと
みをこをのれるべ〻ふをるをバ今もつくあいるれ水菜よ

て和名抄よ胥蓬に女べ〻ぶをるるもよくかをるるふるるハ藺の
るるら〻てをくををもひをれ越のやうなるむひるるをれむの
ひれ老人の髪らづをを臥よ以れでつくも髪此江浦草の髪よ
ゆるる髪をふれるるるを秋成ぶるるよ〻やあ〻やをまるにある
人髪狸の小淡よいれる時つくもをいふるものをくを者ある藻れ
葉末よやるる末のぶ〻くをるるものるくををいるををるをふそ
ひるるをれ小淡の里よハおのまるれよあるをくるくをひれれ〻ゆ
よ藻のれにつくれをくるるるれるれ〻ゆるる末れ
れくをるるるるをれ〻ゆるるるれるれるれるれるれるれるれるれるれるれるれ
のつくも髪れ考ニ云ハるれつるも髪をるるげるをつくるるも髪るそ

さる本の世にひろがり傳はれるなるべし 假字の疊字をくはしく誤りておはさるゆゑそこそ已

が産土(ウブスナ)若狭国の海に都々毛といへる藻あり浦人ども此集りて

菜(ナ)とするをのみ今此俗(ヨ)年始のいはひものとするほどつくもと云を此

きこえ 今国人のなまりしてさつほといへるを浦人などはさつほともいへる数て云をあり けて其藻のすぢはなべ

てくものあはれなるごとく一ふさの長さは三四尺なるもありて茎も枝も

いとほそく連なりて髪をみだれ乱したるごとく海中にある時は色

甚くいさゝか黄ばみたるが其暴乾(カワキ)たるはいたく黄ばみて髪ふさい

ちぢれさく見にくゝつゞきて此をつくもがみ実も同じさまにちゞれ

さし老嫗の髪此にならひたるを譬へていへるなれどもつくも髪と

いへるなるべし ほんだはらは濱藉本草綱目に海藻生海嶋上黒色如乱髪 また馬尾藻とも称て近海諸地采取亦作海菜といへり 文百とせ

に一とせたらぬつくも髪とつゞけたるはつくもはつまれ物事(モノ)の未(イ)た

し満足らはざるやうなるをいへる言にて手業の足りものはざる詞

手つくと云ひ 此言紫式部日記にみえたり又今昔物語にもつくと云詞のたりものはさるをいへり 地名に九の字十

九の字などをつくと言に填(アテ)て書たるにて 大和国吉野郡なる地名を九尾といふ

さ越前国敦賀郡に筒と云処のほとりを当時の文書に其地より生ずる布を九十布と記したるもあり

やうつくもなどいへるつくも物(モノ)事(ミ)を満て足らはせざる義(コロ)とゆゑ 又つくもはつくもてう

てあるそのつくるを満て足はせずして文絶へたる事をいふをそへ

されば百とせに一とせたらぬつくも髪とよみけるがたりしなへといへる此

老もおもしろしげなほくも髪にては年老たるを百とせ

に一とせたらぬといへるなんすこしもやうに聞ゆるかし

ゑいてうにくるたうでまるつくりをえてうばらかくち
うもきくびさしつまるとしてかうこさてうとうきつ
ゑいてうるくるたうでわくつくるゑのをとるおられの
ゑかくるかいまみするをいとうをとりておをとうらし
面白よゑゆうるかなるけあるうかうるいさうでやどれうるまに
ゆくんとてきくるそけううをもうなも男れあれよゆと
いふうよみて出てびわづとくるれんとうていそでくる
にうくん古をよまくるうそ物をにゆくさまくといきれくるうら
のえよもれうぬ従くさて馬にくれうでとらいうばらかく
たちのるのいうをとへで男れおようかうなのとくゆくふて

物語をきくゆくなうかくきうれのそやくゆくんと
て野原のまくあくうびあれるもきくびをわくとて
をはつまるいてうくん
○とうして馬よくくわうでて　塗本よきくびさうをとうる影
とをきくびさつまゆくいて　塗本にしたがく
男古れたうれのやつやくのびてたてうてえもバきう神
うちをげきてぬるて
○古の　塗本よきくがく　うちれぎれて　塗古こなよきくぶく
さむしろうこ衣くくしたちのひをや垂くさくよあそわが紡ん
古今集のうるとのうおわづくて下れ白永をまつくんうどぬく

歌とあるをえてはらふさん一そのをハ様なれむしろによるはなれと
さしれてこよひも恋しき人にはいぞねるらんとうちなげき
ねるくさむしろハ延喜式に廣席狭席とあるをえらまず
せばきむしろをいふなるべし衣かたしきて独ねのさまなるべし
くさ〳〵の書にいへり
このみる我男はつれなしと思ひてそれ故ハ独ねにけり
これもよみそうるいふる我男のきゝてあはまほしく思ひてうちに
いりてねけるとぞ
世の中の例として思ひおもはぬ人あるを此人はそれよりおもはぬ
えきねんなんなりける

例でなくひとつづゝ思ひわかぬをたとへぞうつくしかりける
女をばさらにおもひもちゐず老たるをばさらにおもはぬや
うなるに此人ハこゝろの何ハ残るてなさけある人なればこゝろ
さへ女をも思ひすてずそのうちに思ひおもはぬあるべけれどそのわきち
をえらまんずへあるといふをえいとも見しよりへだてへだつ源氏
見ずさぐう此語りべなるやうに此物語よりけるハさらにそまるび
なるくとれゆもあしくいへるおとしく〳〵やうのんどへえへあるか
ぞ此物語のむねにハありける
○このみ文すべて全本によれり　他本に男の思ひおもはぬをバ思
はぬとはるいとよしくなさやうにて此物語の文ハさもあらじ

六十三段
むかし男女みそかにかたらふわざもせざりければいづくなりけん
あやしさによめる

これはおもはれおもひつくする女の男ところえんとて名をかくしてみ
ねこそぬる男をいひよりてはじめんと思ひけり女は忘じちりける
よそ空くにかくふまでおはさへざりけるもばはは多くなりかくしてそ
忘はへする女慎とてきこゆれど名をかくせるゆゑはいづくれ何
ようなりけんきこえまゐらばなのそらあやしさによみてやる
なりけるそみのつたひはする人あるあはれ女のこころはかなり
ていづこともいはぬほどにこそて昔男女のみかくるはけしからんあ
つそれるをなればも今の世のはやりとかはりて花の草の葉に

かくてはつるものともおもほえてかくてそれを年のやうそへさ
こころむる年ごろもあまり経されはみたるそかへりてたのむべきに
あらでちもそれくし此段はいつもちやうすくれよりくむられてかかる文
なればよのつねにはいろやうしんをやりてそえざれだられえうし
うつきほどもわかくしてみすのりつがしはきあはなべし絶断
はなみそかよらうふわざもせざればなの恋にすむことはいづくらあるらん
もあらではやしみてよそてやるさもはなかりけるに文のかたに
いひてはたふくふさけるいなはそうかくはは古意のあらさて思てもひ
きもし女の名を内なるは心もがなあるいもいひきそそ見ば此女は
んとてもあやしむべからずうき此段のおそくなりはいづくま

るんとはるばるたくうるとまつ
いづくあるらんとおどろきて
法の地獄とていづくみてのるよりそんをたすけていそぎ
らんをいづくらんをいちえんの法をうるゆるくんえんの何と
してとふれもいづくをうんあやしちみてつづけるく男
のおもへ言をいつる何をうるをの
なる風こそ身をなやをばむすびたもまどれ
ばかりをいかづ身をうちせえぬ風をまどゐ何もまどれ
のひとりのとあつていらぬ風をいづ人えをはづかる身も
なくいうてうかづいてくのたれときるくきるを風に

身をなびるうれうひだきくきやうまるとあげるくるんをて方
業集の旋頭哥よいれのをよわれを思で人えはみそ風
よはるばきどしあるべさるのをむるのをすれさけれよりう
かるひたるひたるひのあるどそさバ風をうそとうんをあるをと
まてよあふん
○うまるものを
う人
ともあぬ風ふそはうとをもすぐをたがやうたづひとあるもむぐき
一そうをたるくうちせえぬ風のまうたまうをもすれのうら
人をたれをゆるをのどうたるをいうをうるをいたかづ

なるぬるをんなこうてるやうなあぬいをとりかるとこうるに
てもくちけえぬをいとさてかくゆるぬよーのいくするいさるを
うえてちりけえん

六十四段

むうしみるどちはめるたつうをせるをんなのいろゆるをれるるけ
ア大こやいおるていいるこるいを清いをこうること
はめるたつこせるをんなとハ女の母あくやうにつこせるこうて清
家業の業をするをんいろゆるたこと禁色の衣をゆるをれてきる
をいてつちるハ清家はいみしれをこうーくん禁色ハ延喜式ア
ええて清をよいるれと禁ているハをふたようけるのこて綾羅錦綺
うるぐいを制禁ってみるるきるるのをゆるを母をすぐく

拾ものをるるーくん大こやいおるこを清をうみるるるていみれこ
やいおるを中例をるるれられハ天るの清母君ゆるこよ大御やすおるを
中あるるぐーけて此段ハ清家ようれるを母をるるるるるるるるるく
かるるいて文のあるやとなーれるくん公をにくくーー
○みるぐの塗本よるるるぐ母られるこ世るよ塗さこ本るるるぐ
清いるこ塗紀ニなるようて清るるるるるをくいい
家とよるるむるいるる至系るるるけるる男れるるぐいるるかるるを
此女けいーを女るるる男女ゆるるれるれるれで
家とみえるるるるよるる家とるるむるるるるを至系るるるる男と業
平紀ほをれるるを母てるるけるくあいるるるいをせのかるるいーける

なりはてお伯母さんにまつぐいをさせられ
しとこうよりくらがりとをとこがせらるるとく
女ごろゆをくまるるをやさしてあるんに十三位のほうに
やうろん
女のあるゆよりてむうのをうれぞ女いとかうををろ
じやんうれぜそといひられで
をそれきあるのひくんのかんがへたりやんうれ
こそをういとみぐうしにひるいてゞ人をんん
ぐるしさそふえうをうをもをぬうがたりたる
んといふるんをしてるをそんをたくゞ一昨断おこをこ
ゝにゆ

ふるうかろし
思ふよ生のゆるをそきけよそれがだけはゝゝでは
一それをいれてあひうくをそゝ人さいそとをのゝ
ふをうんのうをんあるをゝをきるをゝをけてつ
るかうかをて冬をほうろがいがるをうがを
をよう冬ハをうゝがいうんをんをいをんを
ふるをそをまけよけるをゝをまゝをのをいをやそを
そハをのをまゝをのをををををををををををををを
と下ハ今をうをををををををををををををををを
といをてをうをふをうをたをのをををををををを

をておぼうねんで出女房いまだ里へゆく

さうし　曹子みて女房の作為くゝ女の神をとるわるし　ちうた

まへぞと隠断よ臺盤所より曹子ふおりたまへ　ちうこいつるあし

臺盤所ハ禁秘抄よ臺盤所三間北間朝餉方敷黄端畳東倚

子其南女房簡入袋ちう古意よりたまへを居ちうまへをう

うちうふいたぐう　さ名かいれの語うなはしいでうまうしと

すべていとぐちうしみそゝ臺盤所なぶはされぐまうしく人めしげ

たゝかれぐもむしひうれハ作為をいとぐつまあのうえされぬで

ちうまへんうちうをて里へゆきてうん

○おうたまへをいとぐちうしかい　塗かよきうぐ　きれぐそれを塗かよきうぐ

けちをバなふのよれちうくれりひてつきかりいうれざみれくをそわ

らひうう

なふのとハちゝ今来のぞよあるのそハ変れちぐものをといつるなをと

ぬれぐまうそて俗語よをんのそれぐとゝをくようれるのとハ女は里

へゆくハようれうのと男は里くハ陰影よ女の里へゆくハなふのく

たうちうちぞと男のけぐうりうふくるとけるハきひえをうう云

をおうのとゝ詞をくうえうるのていうとのく古意ハきれ名かようて

されバなんとてあハのやうをれうれをちうてハうれまで

つうあそうのをぐうれえうれをううてれくみをげうをく

のぼうぬ

はじめて八朔とくみをふみけれどもなくハよべのゆふかけて
はるやうのあまりつゆくさもよべそ女の里にゆきてねてねざめえ
そのをづきのえるみとけるにのそみにけともわたしハでとえまとま
めうりそハ三代実録に業平のうちを放縦不拘といへるいふぞん
ありてかくうるんはて此つきのえうをわきまへずるきらい男れうし、
あくれバく主殿寮洒掃殿庭とゝのふる職員令にみえたる文選之
のまにもとのぞうづきみまうすべき朔きふあつまりまつる事とも
なりれバとはりあきまきにハまうべのするるなれども此はじめらで
てとかくねこなつくくちをきにとりてみくまなげいてハきのびあ
あれのくさきれで皆ある男もくせざるはずなてはしまぬぎかれ

てハとめねしてあくしやうになるバなくみなげいてくえうのあしれ
る貎と人の心ハかくよりもれくあのあはれるべしのぼりぬ八殿とま
かつりめすがをしるべく
かくるをにしてはりわするみ身もいそでよろしぬべくれどつひ
みはるびぬべしとても男ついせんかうがほんやあきつと佛神
にもすくねどいひやまさうみのまねばえつなはるもれくもひしう
みくねだえぬれで
うさうよしうをえぐるしくしつの気まてかよきれとぬぎいれす
るをいうまうでさてもあるべきれどえしくさやうにするをあ
あやくるとすいつくはてかくいつるよう身もいつづくみなるぬべき

をぶらくまでハ犯者の詞そうは男女の中を裂うつしよわろ
じぬべしとそとうふハ男の名いわうとていふる詞をうそへとらして
のをんなやうにそるもだらぐふをそわろぶをと同じを詞
つるれくかとわるまうう契はばハんやつぐうんを動をハ裂をの
侘をし器紙をそ古をるを女の男もつうまはるるうれいぶいる
ぐふなうぬべしをハ男の衆男つしを眾をそわんとをとを
をわるまだたぐうう男のとうを男の男のとををて出もの
てあつをあのをとそをうをわるをれで記者の詞をしてわうをてえざ
をバをはを文つるれくをわうはて文うをくハをんるもをくうを
をを出ひうあ文をえをるれをやうん

わんやうじかんなだよびて悲せでとくはくのぐしてなん
つれる侍

被のまぐ申むうしの法ハ陰陽師神巫などをさするるやはうれ
をれをさををれうをとをのをえをるやうをけるをしの被をるぶ
をかくるの道ふの術をまぐくるくく被の具をうくく古をに
えをうわどをけうひをぐをうくく被のぐをうわるをのあうんをう
をびつをるハかをのけるうをく
はくくるまをいつぐかくをるうぶをうをうしうをけう
をしくけくわぐをえうれで
をくくのをうをくをけをハをうををををををくけををををうむぐ

意をゞかみてしこりけるぞ仏ハうけびをなりにけふ邪
一そのを意をやぬやうをとらしこりけるぞみそなを仏ハうけ
ずもなりにけるれありしようまちうてちひしり紅ハさそ〳〵せんか
こもかきるもとなぐれくこるく世分を今集はえてトウ仏を
うけびもなりにけるしもらけう
とうひてなんきにけるる
なりよるハくうきよけうといみをきう
○きふるる　塗本はまくぶく
世みうぶハ清ほかくちうくれりまて暁よハおりけの清名を
清らはをて清るを意そつをなりにけるてゆ行くをさて

暁のれるおしゆて仏名をとなるちぐうそわくみうぶの清く
はをてなりにける清声みて仏名をゆたまくハかるよハりをく心
づけるを思ふべし昔も今もかハ仏の道をちうけすむをなな
もバちうけて三代実録は清和天皇の御事をまるせるやう
天皇風儀甚美端厳如神性寛明仁恕温和慈順好讀書
傳潛思釋教鷹犬之遊漁猟之娯未嘗留意ゆまるせり此
みうぶいつるハ清和天皇ホかぞくくるく
○清ゑかくち　塗本はようて清の字をくくハは　笑ろくハ
ゆれも同なにうてくくく
女ハくうちなれうかる君はをうまくくですくせたくれくか

なりたるを此男よほろぼされてとてちんあきける

女はいとうるはしくて一とほりにいをうつて次よりそくゆをく

しくいつてふくいひつの文法くすくせハ宿世の字をうて第世

をこにはれば第世のたまれき因縁よりてかゝるかなでたきをよ

ほうまつりをいやうれるものでくるくるゝ行れたるのとまづ申な

げさくるくさて第縁とハいひなぐ世男よりをされてとれるいて

くらをしぐるを注くるくるくれてとハをたるれて行べきを

へえゆるぬやうはさく古今集の第よ世のうはあえぬ山ぢへいう

んあそ男人くそほてしてうれとつてきべ山紅ハあ

るはかるしうれるうう和名抄調度部鞍馬具よ絆釋名

云絆音半和名保太之半也物使半行不得自縱也とあるをれく此ほとし

ハふるくしのふりをつゞめてかとるくる万葉集の第にるふるを

ふをたしかくも牛ふをそれなハうくあいう

かゝるかるみるぐきこらめしけて此男をなぐつるは

てゞれどうれをゞハつるのこやするまでさせて敵のくるに

さるてしをうれたひられでくるをちうてなく

あぐつるれハ近流まて和をれ越第ゑなるべしかの女をバ

つるこある大御島ふのようはるはうんとて禁中をまう

いでさせて侍星の敵れくるいちてしをうれふくしをうそ

いるあるまはるるのくれちるばお侍よるれかのくるをちんても

のまくいせそしをうちうしてまらうとなりぐちうく

○うれ女をバ　塗本ときてぐ〳〵やすあの下に女をぐあるを本ハ

ろ〳〵　殿のくら　塗去二本にしたぐ〳〵

けうとれうぶをふすむ虫のわをうとけをとそあるあ世をぐうにし

一二の日ハ市ますてかくうれえとうもわぐまりきゆゑとまををなく

べしせのくをぐうみじとをとくあるれるぐうくうとち今集よ

ええて典侍為ふ歌ぐ亜ゑ為のぐうりかう

すいくうれう

とまれをきバ此男人の國より板ぐんきて笛なりとわと

しろくうれて聲ハうもくしうてぐをぐけうをようしるる

人のふようえをあぐとわくまふうきめびてきて笛吹ううもく

うれへきし女のきしにふるやとんうとて笛ふれ芋けうして

ぐうくうふうく此うくるいうぐるよりてハきわるのぐうく此今城

ちいハをしておくるおしたるゆゑハ此ぐをきて女さうとのの

ぐうよあるいきれ女のぐハくるよ思ひきうてうくいめで男ハきびれて

あうわやすることてかくしけうれてそのうちも此ぐをうくるま

とをちうせて女のぐれ吹うそ生をるんかくおくるもしてえるく

のちうくをかようしてちうろうぐやうてうるハけうふしあるぐぬ等

れれくくふぐけうくるけて流罪の人れ板ぐれ系よのぐるるハ

れえてけうまぐれてうをあどけうれ侍ゆゑるぐけうをよれう

しくいさんとて古うより流罪をつとめを流されバ遠ざけ
まるまくされど流罪ハ甚配所の制ありてわさくよ地へゆくべう
ぬよりをりて朱雀村などの法師となりて人物の制まちべ
きうぬまバ生所の年ゆきよ時よさとでておくるみまはるべしとや
うにうれうまそにうけうまで流罪ハちくもも越前の國あり
配所の制なくよも和ぶ山あるべき道のほとりべ又
朱雀村との法師ありて流罪の人はまうまよ都山のぼる
やうはまやそはうしまれうまねるべく延喜式刑部省の条
ま越前去京三百一十五里安藝等国四百九十里為二近流一とえうれバ越前よ
ちうて配所へなし

○おうハらぶうしうてうをそ　塗女ようて　つくうをなどと何をく
うれ
おうれバ此女うにさうちうなどうそわるとうさけどあし
うるべうるものうでなんありける
第の言うつうをそれくなうとうさうしぬどうてちうれ
きもバおてもうつわぞうよあるく
○女の下ハすぐ塗女ようてそぶれはるるとの下ハそそぐ
同女ようてくハ
はうとものはふんうそうれあるみをはうぬ身をぶうずて
うれハ男ようてうをうけてようあるくそのうつぐうよわてて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しく思へるをいとつれなくもてなしたるを
さしてのうらをとをふるうらをせたるうらをし
水の尾れ浮時をうべしこれを人の後世人のうたをうたをのなか
れではぶきう

六十五段

むかし男はのゑにしあるやうにあまをうらなどし
れるてなるあはれうるはしきをうあざうをとれば船どもあると
えうく

津の国なる敏馬のうらをうたまうてゆくに又貞明友ひきつれてみる
されうるは敏馬にいたりてあまどもの海のあらくなる
るをなう

なるをうべをふこうそうつの国ぞにいたりやはらみるふるよ
はるかはるをうべをうこうあるみたの浦ぞにあまどもあるいられや此
世をわるるうりはなんちのうみをうをうこうあること
さるはうるはなどさうぎるあまのかぢをうるをうはいそぐく
くるしげをうをうをうはれるゆくはぎに人の世をうるは
まにはうれるん古をはよ世をうるをうをうまづ拾穂初
の後いはわるくいうるもうぢちをうるは説なし注断よ世
上の風波をしぬぐをうぢの船どもはいとくらひさはがぢうを
きうなる信の上をうかいうるふをーとうをけるはーの国をまだ
さをうをうはあまどものうをいーるをうをうをうはーげま

るて延ぶるでハえぬいきよなどをとられぐとかきくるくんをつ
くべしけてもきよ難波津ハくるしつの官津ゑて大津なれバ津
津もとをあくべしとうとうくるくうとうとうと

せうえうは道遥の字音なり荘子の道遥遊篇をもて
よそきこえたるくかの書は昔のちろ世にもてはやして世間
を人のつひなるてもてもてあそぶとまれがきるるもの名目のやうにいなしてせうえう
しふそうの古今集の分け詞をもてうの日うの人のきれを
どもかをものうるよりけるうえうしけるもてもあるた
をふどもは俗語より事のあるどうしををくえうつねさか
きてもてもてもいつてもてうの
かふもれはいこうの心をふれどもうこはすきみたちのるをや
まどまどまどうくをうてしるをもてうをいとちろう本の事りふ

せうえうは
いこうの心をかぎりて東さえ大和西は河内へいづるの国人約そ
えうをうそはのなをいふかちもれはいちもしるをうこと
をみをわくいくのうをもちをよちしたちおそをは家谷
などうなちのぎうりしてくるあどするの二月のそうち
えうてをげをもはをんるがどしさそきのふでいさや
うなうしぎふまさをのをにをうてはたうちうろう
てしるをわるるみるるはるるくつあるの
それをんてうれゆくの人のをうでひうよみを
きのふくの雲れてうちはかくさふはれのそやをうしをうろう

此うきの〳〵ぬるゝ〳〵ぞかなしきもなるまたのみうそやうそうそ
さて雲にたちまいかくれに花の林かうつくしたがくるゝいやさる
るをうしかゝ思ひぬるゝみてくゝうやゝふをゝ狂雲如淮月とを
月此をよ仏ゝうをいとまろう本のまゝうゝるゝ月ゝをの花
の林とゝゆるまゝをいるゝん

○かくさゝふハ古意の伝よりてはゝあたらかくろゝまゝ自
他のたゞひあゝてをのとあるゝさゝたれゝゝたゝをろゝ
みゝたゝあやゝとゝうゝゝかくゝふゝうゝたをめゝている詞
をうゝさゝふハすゝふゝゝゝゝ万葉集のうゝ　こゝゝをゝゝかゝうく
すゝうをゝゝもんあゝゝなんかくさゝふゝゝゝやゝうゝ此ゝゝのうかく

よゝゝゝやの意をゝふゝてもをゝゝゝゝ古意の説文もゝゝふゝて
ゝれどゝうをゝうよゝゝやゝゝゝゝゝゝゝゝかくさゝふ
ゝたゝのゝれゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ又詞の體用の意ゝといゝれ
ゝゝいゝゝゝゝれゝ自他の意ゝう

六十七段

むゝう男いゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ仲ゝゝゝゝ
ゝゝ星ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

古也よ多し　いつる　塗女よりてふのてにをはなどいり

所謂てきくれむ[illegible]く秋ハあれどまのうみづるすこと[illegible]乃後

世ハ所謂なれきく秋ハさられなどいろ〳〵おりしるさ秋ハあれどそ

の秋をまのうみづるまたしど世まとよりの後乃うたにわるれけ

しれをられでどるをくうづるといひさしてまさらじとそん

をちあすとよりけさ乃ちいてあるれるくれをゐをびどそ

をさいいでちせるうかけるみん次の日よられくよまびな

ゐにうちとふるかけるくをるをえでゐるのく脱断古言

などにまのうこびるすみよりとうけるあうとうれるこで

[illegible]

住吉ハすこのえとよむるのをとかれ

ゐをげよ此後のまく〳〵日本書紀神代の巻よ住吉大神（スミノエノオホカミナリ）兵とある

[illegible]ず事を古事記上の巻よ墨江之三前大神（スミノエノミマヘノオホカミナリ）也とらひ仁徳天皇

紀ある住吉仲皇子を古事記ハ墨江之仲津王とかるあてる住

吉ハすこ[illegible]えとよむべくすこよりハのちにまこ[illegible]ひあやまり

ること〳〵[illegible]

住吉須三與之（スミヨシ）とんえるれバ中むうしの[illegible]ハ郡の名里此名をどハすこ

よ〳〵[illegible]

昔の此お話の文よすみをしとかゝることもあるべきるゝみてすゝむることゝ
ほゝゝあらをたゝそ世代のつてにらぶにてきるくよるろろろ
とよあわれだみれ人ちまびきるんそう
○みなく塗本よきらぶ られ人こゝ行る事ハわろ〜